

事例番号 110 市民と事業者が連携してまちをプロデュース(鳥取県鳥取市)

1. 背景

鳥取県の県庁所在地である鳥取市は、県の東部、千代(せんだい)川下流の鳥取平野とその周囲の山地を占める人口約15万人(2000年)のまちである。1573年に山名豊国が城下町を開いたところからまちの歴史が始まり、その後、池田家32万石の城下町として発展した。明治22年に市制が施行されてからは県都として政治、経済、文化の中心地となった。

鳥取市は幾たびか災害に見舞われてきた。大正時代には千代川が氾濫し、1943(昭和18)年には鳥取大震災が発生した。1952(昭和27)年には鳥取大火が発生して旧城下町の街並は失われた。そして、火災復興の基盤整備事業で大規模な土地区画整理事業が行われ、新しい市街地が形成された。1953(昭和28)年には15村合併により市域地の拡大が行なわれた。高度成長期末期の1972(昭和47)年に策定された第一次鳥取市総合計画の将来的ビジョンでは更なる開発方針が示され、それに基づいて市街化区域の拡大、郊外工業団地の開発が進められた。1999(平成11)年度には産・学と調和のとれた住環境を持つ鳥取新都市「ついのニュータウン」の開発整備事業が完了している。



鳥取市の位置

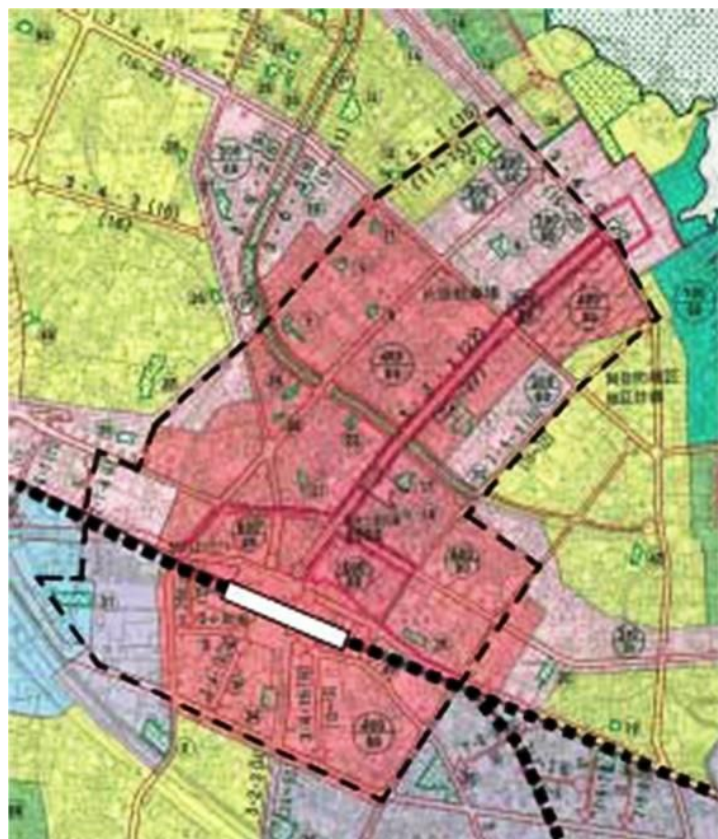
このように開発が進んだ一方、鳥取市の中心市街地では人口が年々減少してきている(現在の定住人口は約15,500人)。市全体に対する中心市街地の人口の割合は1980(昭和55)年当時は17%であったが、現在は10.3%まで減少している。鳥取市全体の人口が年々増加傾向にあることから見ても、中心市街地からの人口流出の顕著さがうかがえる。中心市街地の世帯数は1995(平成7)年までは減少していたが、1996(平成8)年以降は高層分譲住宅建設ラッシュの影響等もあって増加している。人口は減少している中で世帯増であることから、一世帯あたりの家族構成人数は減少傾向にあり、独居者や夫婦二人暮らし、核家族の家庭が増えてきている。中心市街地の高齢者比率は28.0%であり、市全体に対しても高く、この比率は年々上昇傾向にある。このような人口変化を背景に中心市街地は空洞化しつつあるが、その原因としては人口変動以外に以下のものが考えられている。

- ・ 郊外開発の拡大、大型店の郊外出店
- ・ 車社会に対応した都市基盤整備の遅れ
- ・ 建物の老朽化と機能未更新による市街地としての魅力の低下
- ・ 居住人口の減少、高齢化の進展
- ・ 公益施設流出による来街必然性の低下
- ・ 集客力の核となる拠点商業施設の不足
- ・ 郊外の豊富な観光資源との連携不足
- ・ 商店街の販売額低下、空き店舗の増加
- ・ 商店経営者の後継者不足等による活力低下

2. 目標

鳥取市では 1998 年に策定された「中心市街地活性化基本計画」の見直しが 2004 年 3 月に行われた。改訂後の目標は「市民が主役のまちづくりの実践」とされ、以下がまちづくりの 3 つの柱となった。

- ① 都心居住による快適で交流あるまちづくり
- ② 元気ににぎわう都市回遊型観光のまちづくり
- ③ 豊かな文化と歴史的風格があるまちづくり



中心市街地の区域

中心市街地活性化基本計画(改訂版)の新たなまちづくりの方向性

■都心居住による快適で交流あるまちづくり (市街地の整備改善・都心生活交流の推進)

都心に住まうことの快適性を再認識し、コンパクトシティを推進して都心環境の利便性、公共性をより高める。都心における日常の福祉や交流にも力を入れ、またパーク・アンド・ライド等、安心、安全、快適に歩いて暮せるまちづくりのための交通体系づくりを目指す。

■元気でにぎわう都市回遊型観光のまちづくり (商業等の活性化・都市回遊型観光振興)

交流核としての都心の位置付けを踏まえ、鳥取砂丘や賀露、湖山池等に対して「オアシス」となるような鳥取市回遊観光ルート、中心市街地回遊型観光ルートを創出する。訪れて活力と元気が湧き出るまち、ゆったりとくつろげるまちを目指した商店街の情報発信と魅力づくり、鳥取温泉等の観光振興、地域密着型ビジネスによる活性化等を目指す。

■豊かな文化と歴史的風格があるまちづくり (文化振興・歴史資産の保全と活用)

市民生活の中に息づき、伝承されてきた城下町鳥取の豊かな歴史と文化を再発見し、活かし、育てることで住みよく、住みたい「ふるさと」を感じさせるまちの魅力を生み出す。

■市民が主役のまちづくりの実践（鳥取方式の確立）

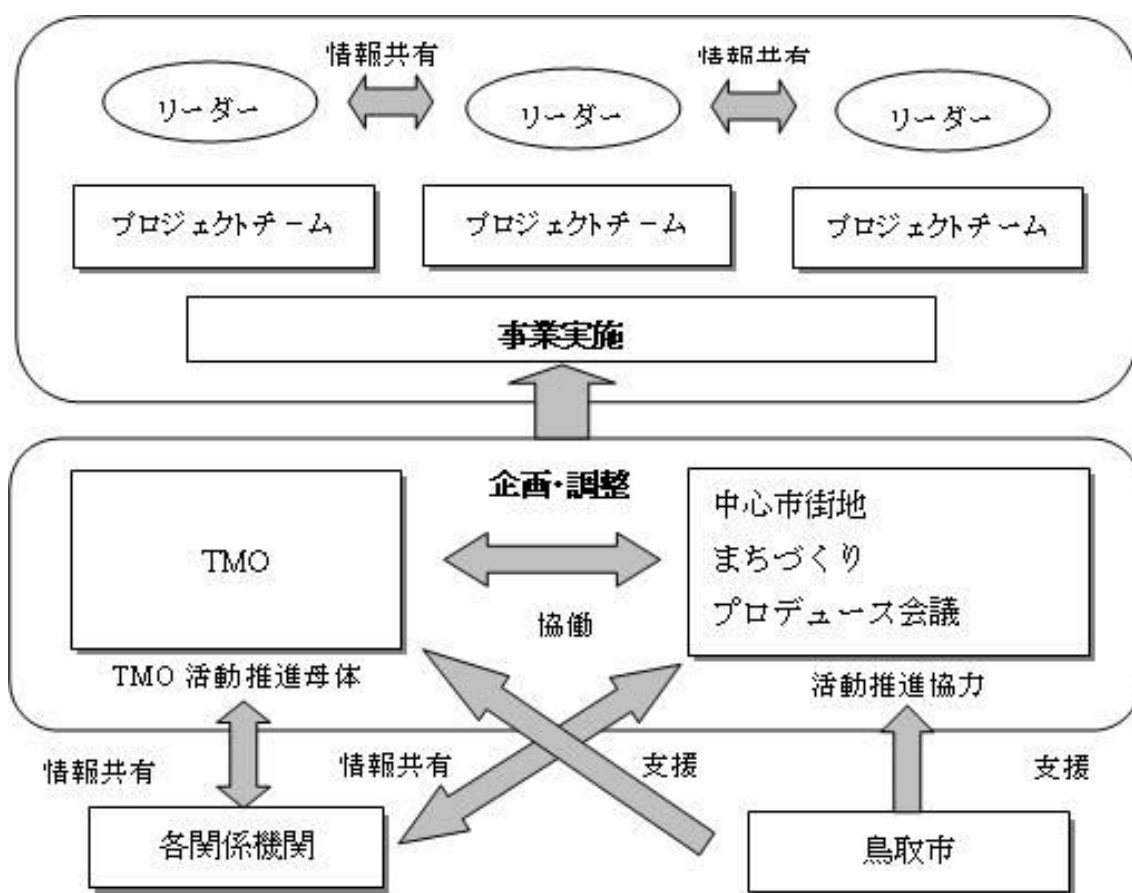
TMOの組織体制を見直し、新たに市民提案（まちづくりの種）を活性化に取り入れ、まちづくりの人材を育み、活性化の目標に基づいて総合的なまちづくりのプロデュースを行なう組織「中心市街地まちづくりプロデュース会議」を設ける。

(資料) 鳥取市「中心市街地活性化基本計画(改訂版)」

3. 取り組みの体制

改訂版の中心市街地活性化基本計画に掲げた「市民が主役のまちづくりの実践」に関しては、TMO の組織体制の見直し、新たな市民憲章の活性化への取り入れ、まちづくりの人材育成、及び、活性化の目標に基づいて総合的なまちづくりのプロデュースを行う組織「中心市街地まちづくりプロデュース会議」の設置などが行われ、いわゆる「鳥取方式」の体制を整えた。同基本計画の事業の実施は、自ら活動する市民・商業者等の実働者により事業ごとに構成される「プロジェクトチーム」を主体にすることとし、TMO、プロデュース会議はこれを協働して支援する体制とした。

鳥取市における中心市街地活性化の取り組みの体制



4. 具体策

(1) TMO 体制の見直しと「中心市街地まちづくりプロデュース会議」の設立

2000(平成 12)年 4 月に鳥取商工会議所が鳥取市の認定 TMO となったが、認定当初は TMO が単独で企画・立案した計画を TMO が事業実施し、市民・商業者等に対しては意見を聴くという体制であった。そのため、事業活動に際しては市民、商業者との協力体制を図るのが難しい状況であった。

② 元気ににぎわう都市回遊型観光のまちづくり

都心のにぎわいを回復するため下記の諸事業が実施されてきている。

- ・ 弥生にぎわい拠点整備事業
- ・ 朝市、フリーマーケット開催事業の充実
- ・ 商店街環境美化促進事業
- ・ 観光サイン整備事業
- ・ 鳥取産業会館整備
- ・ 空き店舗対策事業

③ 豊かな文化と歴史的風格があるまちづくり

都心の魅力を高めるために以下の事業が実施されてきている。

- ・ イベント開催事業
- ・ 歴史的建造物の保存・活用

(3) 市民が主役のまちづくりの実践(「鳥取方式」)

TMO の組織体制を見直し、新たに市民提案(まちづくりの種)を活性化策に取り入れ、まちづくりの人材を育み活性化の目標に基づいて総合的なまちづくりのプロデュースを行なう組織「中心市街地まちづくりプロデュース会議」を設けた。同プロデュース会議と TMO とが連携をとりながら、具体的な事業を行う「プロジェクトチーム」を支援してきている。これまで以下の事業が実施されている。

① チャレンジショップ事業(チャレンジショップ「びぎん」1号館・2号館・3号館)

商店街の空き店舗 3 店を若桜街道商店街、太平線通商店街、鳥取商工会議所とで管理運営し、TMO が経営指導を実施している。各店舗内を 3～5 のブースに分け、計 11 人の新規創業出店者を最長 1 年間支援してきており、卒業後の開業率は 63%と高くなっている。事業効果としては、空き店舗対策や新規創業者輩出の他に、以下の点が想定される。

- i) 商店街のテナントミックスの促進(商店街内の不足業種の補完)
- ii) 商店街の教育力の向上(既存店主の教育を行い「商いの原点」を振り返る)
- iii) 街のオモシロ拠点としての人的ネットワークの創出
(今までにない業種の店に新しい顧客が集まり新たな人的ネットワークが創出される)



チャレンジショップ（写真提供：鳥取市）

② ガーデンシティの推進（「とっとりガーデンフェスタ」の開催）

鳥取 TMO（鳥取商工会議所）では、市民の手で花と緑に囲まれた生活空間を創造する運動こそが「ガーデンシティ運動」であると考え、市民参画型の活動の中から生活環境美化の推進、地域個性の確立、集客性の向上が実現されることを目指し、「ガーデンシティ委員会」を設けて活動を推進している。

その一環として 2002（平成14）年度の国民文化祭「ハンギングバスケットコンテスト」をきっかけに、2003（平成15）年から秋の 3 日間に「とっとりガーデンフェスタ」を開催してきている。同フェスタは、袋川沿いの土手と「きなんせ広場」を利用してハンギングバスケット、コンテナガーデンの両コンテストを行うもので、市民の作品が多数出展されている。同フェスタでは、作品鑑賞ミニツアー、モデルガーデン披露、子供を対象としたキッズガーデン教室、寄せ植え教室、花カフェ広場、花と緑のテントバザール、フリーマーケット、我が家の庭自慢等の多彩なイベントが開催されている。



とっとりガーデンフェスタ（写真提供：鳥取市）

③ 「とっとりまちおこし隊」(市民活動に対し鳥取 TMO が助成)

「とっとりまちおこし隊」は、鳥取市内で地域おこし、まちづくりを实践する独創的な考えや活動を实践する人々が 5 人以上の活動グループを組織し、中心市街地と近隣地域との連携も視野に入れた街づくりを实践することに対し、鳥取 TMO が年間 10 万円の活動資金を最長 3 年間支援するとともに組織活動の推進をサポートし、将来の市民活動団体へ育成していく事業である。現在の実施 10 団体の内容は以下のように多岐にわたっている。使いやすい助成金制度であるとして学生、市民、商業者の間に浸透してきている。

(大学生グループ)

情報誌発行、地域活動、インターネットラジオ番組制作、中山間地域の活性化活動 等

(市民・商業者)

大名蓮^(注)の普及活動、吉岡温泉活性化運動、2 商店街での夜間行灯設置

街に花を植える活動(2 団体) 等

(注) 大名蓮 鳥取市の湖山池は、天然池として日本最大と言われており、同池には古くから「大名蓮」と呼ばれる蓮が自生していた。年々減少傾向にある。



「とっとりまちおこし隊」による商店街での夜間行灯設置（写真提供：鳥取市）

④ 「パレットとっとり」運営支援事業

2005(平成17)年4月8日に本通商店街が事業主体となって「パレットとっとり」がオープンした。これは、中心市街地への来街動機や頻度や利便性を高めるために、最寄品店舗や地場産品の店、市民交流ホールを整え、集客と賑わいをもたらす広域交流拠点となることを意図した商業基盤施設である。中心市街地への波及効果を高めることも期待されている。

開業後の来館者数の点では予想以上に順調な滑り出しを見せた。今後は商店街との連携を強化して集客効果を中心市街地全体に波及させていく仕組みを作ることが課題になっている。

⑤ 「市民交流ホール」の運営

とっとり TMO が運営している「市民交流ホール」は、市民団体活動の場、発表の場として活用されており、美術品展示会、フォーラム、音楽会、会議など、ほぼ毎日何らかのイベントが行われる「市民の広場」として活況を呈している。

⑥ イベント支援

鳥取市からの補助金を財源に、中心市街地エリアでイベントを行う団体・事業者に対して補助する制度(総事業費の3分の2を補助)を実施している。

5. 特徴的手法

行政、事業者中心の従来 방식을大転換して市民の自主的な活動を尊重する方式を採用し、TMO と並んで「中心市街地まちづくりプロデュース会議」という独自の組織を設けたことが大きな特徴である。具体的な事業の実施を市民等による「プロジェクトチーム」に委ねることによってまちの底力を大いに高めているものと思われる。

6. 課題

これまでの活動の経験を通して、チャレンジショップの賃貸期間(最長1年)の見直しが課題となっている。公的に整備・運営されている施設のため、機会の公平性からも特定の出店者が長期にわたり利用することは難しい面はあるが、卒業後の開店準備期間も必要という事情がある。

(参考・引用文献)

ホームページ「街元気プロジェクト」－鳥取県鳥取市－

同上;事例紹介(鳥取県鳥取市)『驚異の独立開業率 60%以上を誇るチャレンジショップ』